

# 福島県会津地方の建築文化

— 一番匠巻物を中心に —

宮内貴久\*

日本では、建物を建てる際に、その節目に儀礼が行われそれを建築儀礼という。建築儀礼は、主に神主・大工が儀礼を執行し、野生の空間を秩序化していき、人間が居住可能な空間を構築することを目的とする [宮内1989]。法隆寺を代表とする社寺建築に対して、生活の場である日本の民家は木造のため耐用年数が短く、最古の民家の一つとされる兵庫県神戸市北区山田町衝原の箱木家(国指定重要文化財)でも14世紀である。関東地方では17世紀に遡ることが出来る民家は極めて少ない。

## I. 建築儀礼

### 1. 地鎮祭

地鎮祭では、土地を浄め、地の神様に家建てることを許可してもらうための儀礼が神主により執行される。その際には、暦を見ながら日取りと方位を決め、吉日を選び、金神、土公神がいる方位は避ける。高島暦など市販の暦を使う宗教者もいるが、山形県西置賜郡飯豊町の法印は、特に依頼が多い暦日をまとめた「選日帳」というメモを作成して使用している。

### 2. 地突き

地突き・胴突きは、建物の基礎となる礎石を固定する作業で、村人総出で行われる。まず敷地に柱を立てる場所に礎石を置く。櫓を組んで真ん中

の木を落とすことにより、礎石を突き固めていく。その際には、胴突き歌という労働歌が歌われたが、その内容は卑猥で性的な歌であった。礎石を突き固める作業が性行為に似ていること、これから建てられる家の子孫繁栄を祈るための歌と解釈されている。

### 3. 上棟式

柱などの部材が揃い、柱を立てて棟木を納めた段階で行われるのが上棟式である。大工が主催し、柱を立て棟木を収める。棟木には、五色の吹き流し・鬼門に向けた弓矢・供物として餅が供えられる。五色の吹き流しは陰陽五行説の五行を象徴する色である。後述するが、会津では大工が巻物を広げて読むという民俗がある。上棟式では櫛や筭など女性の持ち物を供える点が特筆される。これには二つの伝説がある。

#### ・大工女房犠牲譚 I

ある大工が有名な社寺の建築を請け負う。ところが、上棟式の前日に柱を一本短く切ってしまったことに気がつき困ってしまう。女房から枡組を教えてもらい、それを使えば短さを補うことができ、また見た目もいので枡組で寺を建てた。見事なできばえで、大工は名声を得る。しかし、女房に教えてもらったことがばれると自分の評判が落ちると考え、恐れ女房を殺す。それ以来、殺した女房を供養するために女の物を奉納するようになった。

女の持ち物とは、櫛・筭・紅など化粧品で、この伝説 I は全国的に分布している。

\*お茶の水女子大学大学院准教授

#### ・大工女房犠牲譚 2

これとは別の似たような伝説がある。ある大工が京都の千本釈迦堂の建築を請け負う。ところが、柱を一本短く切ってしまう困ってしまった。女房のお福が枡組を考えつき、その通りに建てたところ、うまくいき名声を得た。それ以来、お福の功績を讃え、女の物を奉納するようになった。

千本釈迦堂にはお福の石像があるが、奉納者の中には、大林組、鹿島建設など日本を代表するゼネコンの名前が刻まれている。このことからもお福が、現代でも広く信仰されていることがわかる。上棟式の際に飾るというお福のお面も境内には奉納されている。この伝説は京都府、岡山県、香川県など西日本に分布しており、上棟式の際にお福のお面を飾るという民俗が伝承されている。

#### 4. 奥会津の火伏せ信仰

奥会津地方の建築儀礼で特徴的なのは、上棟式の際に火伏せの神という木製の男性器と女性器を棟木に奉納することである。棟木の上部に奉納される。火伏せの神は奥会津地方でも近世、旧御蔵入領という幕府直轄地にだけ分布している。火事除けとして、さらに子孫繁栄を願う、すなわち性的信仰である。南会津郡只見町では男性器と女性器を向かい合わせに奉納するのが一般的であるが、南会津郡南郷村のように曲げわっぱを女性器に見立てたものもある。これらの呪物は大工が作成するのではなく、素人で造作が得意なものが作成する。奉納する前に建て主の妻がお粥をかけるという習俗がある。

## II. 番匠巻物

### 1. 番匠巻物とは？

奥会津地方の建築文化の最大の特徴は、大工の由来譚・建築儀礼次第・大工道具の由来譚・呪い歌が記された巻物が、現在でも師匠から弟子に伝授され、上棟式で使用される点である。これまで、

日本民俗学会、日本民具学会で報告し、さらに報告書や論文で発表した。日本で現在でも巻物の伝授が行われているのは、奥会津地方のみである[宮内2003]。また、全国的に史料調査を行い、全国各地で同様の巻物を見つけたが、ほとんどの地域では巻物の伝授は幕末で途切れている。その意味で、会津地方の事例は極めて貴重だと言える。

### 2. 巻物の民俗

聞き書き調査を行うと、「巻物を娑婆の風に当てると祟る」「なにもない時に開けると目がつぶれる」「使用するのは上棟式の際だけ。ただし、正月は一日だけ風に当てても良い」などの民俗を聞くことができる。

例えば、ある大工は数十キロ離れた現場の仕事を請け負った。そして、上棟式の前日に自転車で自宅に巻物を取りに行ったそうである。「現場に持参したら、奥さんに持ってきてもらった」、と私が言うと、「そんな命の次に大事な巻物を現場で無くすわけにはいかないし、例え妻でも他人に持たせるわけにはいかない」とのことだった。それだけ大事にされているのである。

また、会津では巻物を持っていないと一人前ではないとされ、仕事がない。巻物は一人前の証であり、それを伝える以下のエピソードがある。

渡部工務店は、従業員が十数人おり、南会津郡只見町では大手の工務店である。社長が急死したため、巻物を伝授されていなかった若い弟子たちは大騒ぎになった。葬式が終わり、神棚を掃除していると、まだ巻物が伝授されていない弟子たちに伝授する巻物が出てきて、みんな安心したそうである。それだけ、巻物は大切にされ神聖視されている。ちなみに、この話は2007年に起こったことである。

奥会津地方最古の巻物は、大沼郡金山町中川の田邊家が所蔵する宝暦9年(1758)のものである[宮内2004]。巻物の所在調査は、現在活動している大工の所に伺い巻物を写真撮影して、師匠が誰

なのか？巻物の民俗を聞き、兄弟弟子を紹介してもらい集めていった。数十本集めた辺りで、おぼろげながら、いくつかの流派があることに気がついた。

巻末には伝授者と伝授年が記されており、系譜を知ることが出来る。その中で、共通して、「水戸大畑彦左衛門」「田邊杢之進」という名前が記されていた。「田邊杢之進」の子孫を調べたところ、幸運にも子孫宅が判明し、田邊杢之進の巻物を見つけることができた。田邊杢之進は実在する人物だったことが確認された。杢之進の巻物は、一部焼け焦げていて、新たに神が裏打ちされて文字が記されていたが、この点については、後述する。

### 3. 名工 田邊杢之進

#### (1) 文書が伝える杢之進

杢之進に関する史料は極めて少なかったが、幸い、宗門改帳が現存していた。表1にまとめたように、杢之進は享保12年（1727）生まれ、寛延4年（1751）には慶純と号する。宝暦9年（1758）に水戸の大畑彦左衛門から巻物を伝授されるが、その経緯については不詳である。宝暦11年（1761）に息子の儀三郎生まれる。文化2年（1806）には金山町大塩の大塩神社を建立し、文化5年（1808）に享年81歳で亡くなった。杢之進の墓は金山町中川に現存しており、墓の下部には弟子たちの名前が刻まれていると伝承されているが、風食が激しく読み取ることは不可能だった。

表1 杢之進の生涯

年代	主要な出来事
享保12年(1727)	生まれる
寛延4年(1751)	慶純と号する
宝暦9年(1758)	水戸の大畑彦左衛門から巻物を伝授
宝暦11年(1761)	息子の儀三郎生まれる
文化2年(1806)	大塩神社建立
文化5年(1808)	死去（享年81歳）

#### (2) 伝承が伝える杢之進

杢之進は奥会津ではたいへん有名な大工で、奥会津地方の大工から彼についての伝説を聞くことができる。

例えば、「杢之進がこのへんの番匠のはしり」「虚空蔵菩薩で有名な柳津町の円蔵寺本堂の改築に棟梁として参加した」「円蔵寺本堂の檜の仕事を請け負った」などの話である。

名工伝説としては次の伝説Iがある。

伝説I. 「柳津の虚空蔵堂の改築を行った際に、杢之進は上屋の棟梁を務めた。おもしろくないある番匠が、杢之進が墨付けした部材の墨を消して、わざと短く墨付けした。しかし、杢之進はそういうこともあるだろうとわざと長めに墨付けしていた。部材を削り、柱を組む前に尺を計ったところ、計画よりも短かったため大騒ぎとなった。杢之進は名主に頼んで村人全員を集めた。短くなった柱の両端を村人総出で引っ張り、杢之進は『それ、がんばれ。もう少しで長くなる』とかけ声をかけながら、真ん中を玄翁で叩き続けた。しばらくして、杢之進が、『もう大丈夫だ。柱は元の長さになった』と言い村人に感謝して仕事が終わった。それを見ていた件の番匠は、いたたまれなくなり後で杢之進に詫言を入れた。」

伝説Iは先に紹介した大工女房犠牲譚がベースとなっている。大工女房犠牲譚Iでは女房を殺してしまうが、杢之進は柱が短くなることを予見していた優秀な大工として語られているのである。ある大工は、犯人捜しをすると現場が荒れてしまうので、柱を短く切った犯人捜しをするかわりに村人総出で引っ張るというパフォーマンスを行った杢之進の行動は、現場を統率する棟梁の心得を伝える話だと語っていた。同様の名工伝説は宮城県気仙地方の船大工にも伝わっている。

次の伝説IIは巻物の持つ呪力を伝える話である。

伝説II. 「杢之進が所蔵した巻物には一部焼け跡がある。本名の杢之進の系譜を継ぐある番匠が、巻物を書写するために杢之進の巻物を借りた。

書写が終わった頃、ある家で上棟式があったため、書写した巻物と杵之進の巻物の二つを持参して上棟式を行った。ところが、祝詞をあげていると、どういう訳か書写した巻物に灯明の火がついてしまい、家が全焼してしまった。ところが、どういふわけか杵之進の巻物は近くの田圃に突き刺さった形で発見された。不思議なことに家も巻物も全て燃えたのに、杵之進の巻物は一部が焦げただけで済んだ。」

杵之進が所蔵する巻物は火事でも焼けなかった、不思議な呪力を持っていたという話である。先に指摘したように、確かに杵之進の巻物には焼け焦げた跡があり、伝説を裏付けているわけである。ある大工から、杵之進の巻物を見たことがあると伝えると、「焼けこげはあったかと問われ、「あった」と答えると、伝説は正しかったんだと納得された経験がある。

ところが、杵之進の地元の金山町中川では、あれは子供の火遊びで焼けてしまったと伝わっている。焼け焦げた真偽はともかく民俗学的には、偉大な名工が所蔵した巻物に呪力があり神聖視されている点が興味深い。

フィールドワークをしていると、「現実には小説よりも奇なり」という場面に遭遇することがある。

奥会津地方は越後、新潟県に隣接しているため、越後から来た大工の話聞くことができる。越後大工の調査をしている時に、金山町沼沢に越後大工の系譜を継ぐ大工が存命であることを知った。沼沢に赴き、まず区長に挨拶をして調査の趣旨を説明した。区長からは、その大工は90才を超える高齢であること、昼食後は昼寝をするから夕方行った方が良いという助言をもらった。また、その大工の家は昭和30年代に火事で全焼しているから、巻物はないだろうと言われた。私は系譜だけでも知りたいと思い、夕方、お邪魔しまして越後大工の話聞いた。帰りしなに「巻物を拝見したい」と申し出ると、「ここにはない」と言われた。私が「区長さんから全焼したと聞きました」

と言うと、「そう、全焼した。巻物はここにはない」とのこと。話がかみ合わないと思っていたら、次のような事情であった。

「家は全焼して仏壇も全て燃えてしまった。焼け跡を整理していたら、桐の箱に入れておいた巻物は焼けなかった。息子が大工をしているので、巻物は自宅ではなく、息子の家にある。」

現実には、火事にあっても巻物は焼けなかったのである。

#### 4. 番匠一流一六巻

水戸の大工大畑彦左衛門から伝授された「番匠一流一六巻」という杵之進の巻物であるが、その原典は何なのか？どのような系譜を継ぐ文書なのだろうか。当初は荒唐無稽、偽文書だと考えていた。と言うのも、奥会津には他にも木地師やマタギが所蔵する巻物が存在し、その内容には信憑性がなく、歴史学では偽文書として扱われてきたからである。また、杵之信系統以外の文書の系譜には、「従四位下木工頭藤原顕信」「従五位上木工権頭大江信安」など怪しげな名前が連なっていた。このため偽文書と考えていた。

杵之進の巻物は「番匠一流一六巻」という題名にあるように、「一番匠児屋之大事」から始まり、「十六巻番匠棟上ノ大事」の一六巻から表2のように構成されている。

表2 番匠一流一六巻の内容

一番匠児屋之大事、二巻番匠細工箱大事、三巻番匠大工通神木ノ罰大事、四巻番匠墨坪ノ大事、五巻番匠墨指ノ大事、六巻番匠鉄之大事、七巻番匠新立ノ大事、八巻尺杖之大事、九巻番匠鋸之大事、十巻鑿ノ大事、十一巻礎柱立之大事、十二巻柱立之大事、十三巻龍伏次第二立大事、十四巻番匠造作ノ大事、十五巻番匠修理大事、十六巻番匠棟上ノ大事
--

文書形式としては切紙形式である。切り紙というのは、一項目を伝授されると伝授された一紙をも

らい、それを貼っていくと16巻の巻物になるという形式である。そのため一紙ごとに伝授日が記されている。また、文書の由来であるが、「此の巻物ハ大師大唐ノ帝王ヨリ相承（中略）日本大工奈良ノ大工左衛尉朝清授」とある。「奈良ノ大工左衛尉朝清」という人物については不詳である。

一六巻の内容であるが、大工の由来譚・建築儀礼次第・大工道具の由来譚・各儀礼で唱える呪い歌が記されている。呪い歌は27首記されている。例えば、「十四巻番匠造作ノ大事」に記されている呪い歌は、「君が代は千代に八千代に細石の巖となりて苔のむすまで」である〔宮内2009〕。

最後に、水戸の大工大畑彦左衛門から伝授された「番匠一流一六巻」という杵之進の巻物だが、その原典が明らかになった。

類似した内容の巻物が見つかったのである。最初に見つけたのが、埼玉県秩父郡皆野町にある写本である〔皆野町誌編集委員会 1981〕。その後、「番匠一流一六巻」は三輪神道の系譜を継ぐ文書であることが判明した〔大神神社史料編修委員会 1978・1979〕。「御流神道堅印信集一 番匠之大事」という高野山が所蔵する慶安2年（1649）の文書が存在することが明らかになった〔神道大系編纂会 1992〕。また、徳島県阿南市の岡下家からは延宝2年（1674）の巻物が見つかった。当初、不明だった発信元が奈良県桜井市の三輪神社だったことが明らかになったのである。

## おわりに

現在、全国的に史料調査を行っている。金沢市立近世史史料館所蔵の加賀藩大工頭を務めた清水家文書（現在の清水建設）の中にも、三輪神道の系譜を継ぐ大工儀礼書が存在する。神戸の竹中大工道具史料館にも存在する。これまで近世史では吉田家による吉田神道支配については研究が進められてきた。今後の課題として、近世における三輪神道の位置付け、さらなる一次史料の収集を

行っていきたい。

## 文献

### 【論考】

- 八田幸雄 1991 「生活に生きる神道－神道大工一八通－」『神々と仏の世界』平川出版社
- 花部英雄 1998 『呪歌と説話』三弥井書店
- 松尾恒一 2000 a 「両部神道遷宮儀礼考－御流神道を中心として－」山本信吉・東四柳史明編『社寺造営の政治史』思文閣出版
- 松尾恒一 2000 b 「物部村の職人と建築儀礼－大工法をめぐって－」『民俗芸能研究』第32号 民俗芸能学会
- 宮内貴久 1989 「住居空間の創造とその維持－奥会津地方の建築儀礼の分析を通して－」『日本民俗学』179号 日本民俗学会
- 宮内貴久 2003 「呪物としての番匠巻物」『民具マンスリー』第三六巻七号 神奈川大学日本常民文化研究所
- 宮内貴久 2004 「田邊杵之進の系譜と活動－番匠巻物を中心に－」『民俗建築』第125号 日本民俗建築学会
- 宮内貴久 2009 「奥会津の番匠巻物－系譜・由来・呪い歌－」笹原亮二編『口頭伝承と文字文化－文字の民俗学・声の歴史学－』思文閣出版

## 史料

- 大神神社史料編修委員会 1978 『大神神社史料』第五巻 大神神社史料編修委員会
- 大神神社史料編纂委員会 1979 『大神神社史料』第六巻 吉川弘文館
- 神道大系編纂会 1992 『神道大系 真言神道（下）』神道大系編纂会
- 皆野町誌編集委員会 1981 『皆野町誌 資料編三 中世近世文書』皆野町

## 編集付記

本論文は、昨年度刊行いたしました「大学院教育改革支援プログラム『日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成』平成21年度活動報告書海外教育派遣事業編」の掲載論文ございましたが、編集の関係で今年度の掲載となりました。執筆者ならびに関係各位にご迷惑をおかけしましたことを心よりお詫び申し上げます。